

Title	音声生成における高次機能から末梢機能までの計測とモデル化に関する研究
Author(s)	党, 建武
Citation	科学研究費助成事業研究成果報告書: 1-6
Issue Date	2013-05-23
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/11367">http://hdl.handle.net/10119/11367</a>
Rights	
Description	研究種目: 基盤研究 ( C ), 研究期間: 2010 ~ 2012, 課題番号: 22500150, 研究者番号: 80334796, 研究分野: 音声科学、音声生成生理学的モデル, 科研費の分科・細目: 情報学・知覚情報処理・知能ロボティクス

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：13302

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22500150

研究課題名（和文） 音声生成における高次機能から末梢機能までの計測とモデル化に関する研究

研究課題名（英文） Study on the measurement and modeling from higher-order functions to peripheral functions involved in speech production

研究代表者

党 建武 (TOH Takeshi)

北陸先端科学技術大学院大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：80334796

研究成果の概要（和文）：本研究では、従来の生理学的発話機構モデルを末梢器官モデルとして精密化し、ハイレベルモータ表現からローレベルモータ表現への写像を取り入れ、ニューロン計算モデルを構築して、幼児の言語音声学習の模擬によりモデルの妥当性を確認した。母音学習実験では、なじみのない音声を知覚するとき、被験者は母語音響空間に投影することでバーチャルターゲットを形成し、そのターゲットに接近するように学習していることを示唆した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we constructed a neuro-computational model by refining the previous physiological articulatory model as a peripheral organ model, where a mapping was established between high-level motor representation to low-level motor representation. The neuro-computational model was confirmed by simulating the speech learning in babbling stage. The results of the vowel learning experiment imply that when perceiving an unfamiliar speech sound, subjects seem to build up a virtual target by projecting the sound to their own acoustic space of the native language, and then approach the target during the learning process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：音声科学、音声生成生理学的モデル

科研費の分科・細目：情報学・知覚情報処理・知能ロボティクス

キーワード：音声生成、生理学的モデル

## 1. 研究開始当初の背景

人間の音声生成過程は、脳の高次制御から発話器官の生理物理的な運動まで、数多くの機能に関わっている。言語音声を獲得する際には、発話機能と知覚によるスクリーニング機能を密接に結ぶ情報交換の通路（言葉の鎖）が脳内で形成される。この情報交換通路により人間は音声を頑健に処理できるが、通

路に支障があると様々な発話障害が生じる。そのため、人間の音声生成・知覚及びその制御のメカニズムに関する研究が数多く行われてきた。

これまでの研究を大別すると、生体計測技術に基づく手法とモデル模擬による手法に分けられる。計測研究として、ATRは、fMRIを用いて発話中枢機構の機能の計測

を試みた<sup>1</sup>。山形大学は、癲癇患者に対して皮質電気刺激により、言語性コミュニケーションの脳内発話機構を考察した<sup>2</sup>。ただし、計測技術の制約と倫理規制のため、計測研究による方法には限界がある。これに対して、生理学的ニューロン計算モデルを用いる模擬手法は、非侵襲方式による脳の高次機能の研究には有力なアプローチとなる。ニューロン計算モデルを用いる研究として、米国ボストン大学は、聴覚フィードバックを含む音声生成のニューロン計算モデルを提案し、言語野や運動野における脳の活動を模擬した<sup>3</sup>。ドイツのアーヘン工科大学は、さらに視覚フィードバック機能を取り入れて音声知覚のマガーク効果を模擬した<sup>4</sup>。ただし、上記の研究では、発話運動を実現する末梢器官には幾何学的調音モデルが用いられていたため、脳の指令に対する人間の生理学的な働きを再現するには不十分であった。正確に脳における音声生成の制御機能を理解するには、音声生成過程の末梢器官モデルとして、人間の発話機構をより忠実に再現できる生理学的モデルが必要不可欠である。

本研究代表者らは、解剖学的データとMRIデータに基づき、すべての発話器官と関連筋肉を取り入れ、生理学的発話機構モデルを構築し、人間の発話運動の全過程を実現することに成功している<sup>5</sup>。舌の生理学的モデルについては、仏国立科学研究センターGISPA-LabとカナダUBC大学もモデルの構築を中心として研究を展開している<sup>6</sup>。ただし、発話目標から、筋の収縮、発話動作及び音声合成までの音声生成の全過程を実現できたのは我々の生理学的発話機構モデルのみとなっている。さらに、我々は、変形聴覚フィードバック

を用い聴覚に摂動を与えて、調音運動と筋電図などの計測により、音声生成と知覚との相互作用に関する脳の機能を研究してきた<sup>7,8</sup>。

本研究は、これまでの我々の研究成果を踏まえ、生理学的発話機構モデルを基に、脳の高次機能から末梢器官の生体物理的な機能までを忠実に実現できる、生理学的ニューロン計算モデルを構築し、言語音声の獲得や音声生成のメカニズムを模擬することを目標とする。

## 2. 研究の目的

人間の音声生成では、発話計画や調音器官の運動制御、聴覚による発話のスクリーニングなど、脳の高次機能から生体物理運動までの過程が関わっている。人間の音声生成機能に関連する、言語音声の獲得や発話障害、未解明問題が山積しているが、技術的・倫理的な制限のため、実験的な手法により解明することが困難である。そこで、本研究は、生理学的発話機構モデルを基に、発話計画、発話運動制御、視覚・聴覚フィードバックなど脳の高次機能を取り入れ生理学的ニューロン計算モデルを構築し、モデルによるシミュレーションと計測データとの比較により、人間の音声生成過程および発話障害を解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 人間の発話機能を忠実に実現するために、観測データに基づいて、本研究グループが開発した生理学的発話機構モデルをさらに精密化する。そこで、我々はカナダUBC大学研究グループによる開発したツールキットを利用して、現有の生理学的発話機構モデルを離散型から連続型のモデルに発展させる。

(2) DIVAモデルを参考にして、高次機能のモジュール化を行う。これと同時に、精緻化した生理学的発話機構モデルを取り入れるために、人間の音声生成における「運動計画→運動コマンド→筋肉の収縮→発話器官の動作」という生理学的なプロセスの定式化を検討する。音声生成の生理学的ニューロン計算モデルの構築を行う。構築したモデルに対して、パラメータを変動させながら数値シ

<sup>1</sup> 能田, 本多 (2004) “fMRI による発話中枢機構の観測”, 音声研究, 8-2, pp. 28-34.

<sup>2</sup> 鈴木 (2003) “言語性コミュニケーションの脳内機構発話の脳内機構: 皮質電気刺激による検討”, 神経心理, 19, 01

<sup>3</sup> F. Guenther, et al. (2006) “Neural Modeling and Imaging of the Cortical Interactions Underlying Syllable Production,” *Brain & Language*, 96, pp. 280-301.

<sup>4</sup> J. Kröger, et al (2009) “Towards a neurocomputational model of speech production and perception,” *Speech Communication*, 51, pp. 793-809.

<sup>5</sup> Q. Fang, S. Fujita, X. Lu, J. Dang, “A model-based investigation on activation of the tongue muscles in vowel production,” *Acoustics of Science and Technology*, 30, 277-287 (2009)

<sup>6</sup> S. Buchaillard, et al (2007). “3D statistical models for tooth surface reconstruction,” *Computers in Biology and Medicine*, 37(10), pp. 1461-1471.

<sup>7</sup> Y. Koba, J. Dang, “Investigation of relations between capabilities of speech production and phonemic restoration,” *International Workshop on NCSP, Australia*, 335-338 (2008)

<sup>8</sup> J. Dang, K. Akagi, K. Honda, “Communication between Speech Production and Perception within the Brain -Observation and Simulation-,” *J. Computer Science and Technology*, 21(1), 95-105 (2006)



一タ表現とローレベルモータ表現への写像を学習できたことを示唆している。

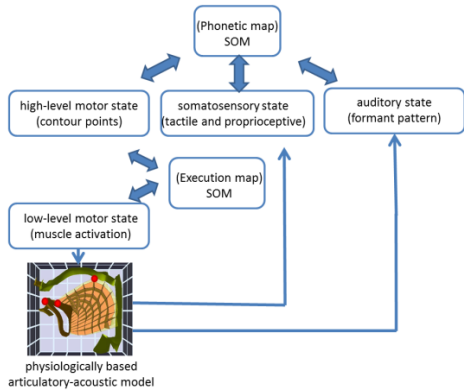


図4 提案したニューロン制御モデル

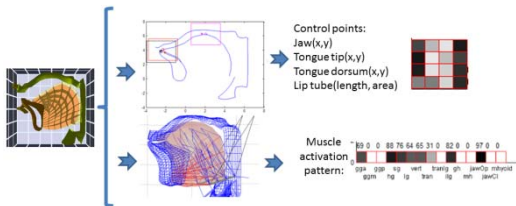


図5 制御パラメータとそのニューロン表示

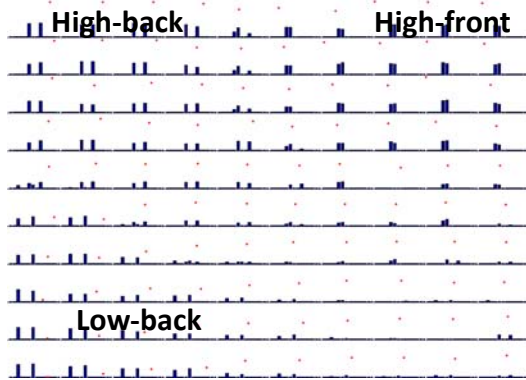


図6 調音位置とモータニューロンとの関係

(3) 非母語学習過程における音声生成・知覚との関連

本研究では、復唱による母音学習過程に着目し、長期間にわたって、被験者の復唱音声と内観を分析することで、学習において利用される音響特徴量や学習過程における知覚カテゴリーの変化を考察した。

日本人被験者に対して英語母音/æ/、ロシア語/ju/などなじみのない非母語母音を用い、実験のパート1では音声のみを被験者に提供して復唱させたが、パート2ではターゲット話者の調音運動を見せながら学習させた。復唱音声と調音位置を磁気センサシステム(EMA)により同時に測定した。計測した調音運動とフォルマントの変化を図7に示す。学習の初期段階で、フォルマントは徐々にターゲットのそれ(水平線)に近づいて、調音運動を見せた(縦破線で表示)時、発話運動とフォルマントと共に大きく変化され

た。それは、調音運動の視覚情報により発話学習を促進させることを示唆している。

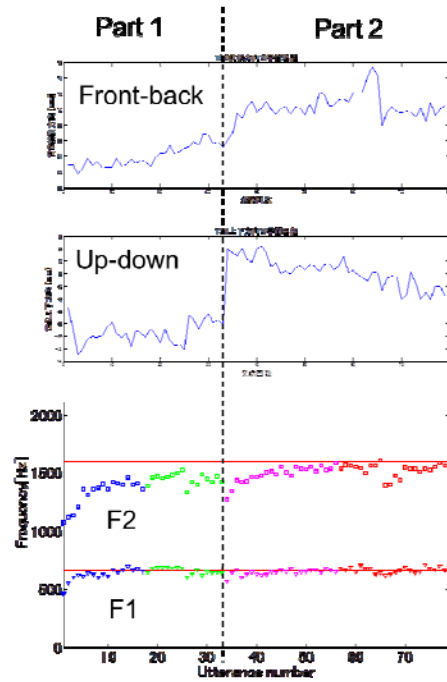


図7 /æ/の学習過程(調音前後・上限運動、F1・F2)

複数話者に対して、非母語の学習過程と母語の音響空間との関連を検討した。二人の被験者の母語音響空間を図8に示す。ターゲット音声(/æ/, /er/, /oo/, /ih/, /ju/)をその上にプロットし、復唱による学習過程には被験者1(黒マーカ)と被験者2(赤マーカ)はそれぞれ異なる初期位置からスタートし、異なる位置に収束した。しかしながら、各被験者の母語音響空間におけるターゲット音声の収束点の相対的位置は大体一致している。それは、なじみのない音声を知覚するとき、まず被験者の母語音響空間に投影し、バーチャルターゲットを形成し、それにそのバーチャルターゲットに接近するように学習していることを示唆した。

被験者の内観から学習途中には目標母音に対する知覚カテゴリーの変化が生じたものと生じなかったものがあることが分かった。これは、おそらく人間の調音と同様に知覚空間にも安定した場所と不安定な場所が存在しており、音響的にも調音的にも安定した場所を探索するように学習が行われている可能性が考えられる。

(4) 脳電信号により多感官情報整合の研究

我々は、短期多感官記憶が多感官情報による認知整合への影響を研究するため、元に生態的に関連のない音声と画像を試料として、被験者にその関連を学習させた上、多感官の意味プライミング実験を行った。その結果、プライミング画像及び目標音声は多感官の記憶と一致したとき、被験者の応答時間が短く、しかも100-160ms gamma波領域での活動は不





- く生理学的発話機構モデルの筋配置の個人化に関する検証,” 日本音響学会秋季研究発表会, 信州大学, 長野, 2012, 9, 19
10. S. Hyon, H. Wang, C. Zhao, J. Wei, J. Dang “A method of speaker identification based on phoneme mean F-ratio contribution”, Interspeech, Portland, USA, 2012, 9, 13
  11. 西村, 川本, 党 “MR 画像に基づいた変形による生理学的発話機構モデルの個人化,” 日本音響学会聴覚研究会資料, 42(4), 357-362, NTT 厚木研究開発センター, 2012, 6, 14.
  12. A. Li, Q. Fang, Y. Jia and J. Dang. Successive Addition Boundary Tone in Chinese Disgust Intonation, NACCL24, San Francisco, USA, 2012, 6, 9
  13. A. Li, Q. Fang, J. Dang. Emotional Expressiveness of Successive Addition Boundary Tone in Mandarin Chinese. Speech Prosody 2012. Shanghai, China, 2012, 5, 22
  14. Y. Wang, H. Wang, J. Wei, and J. Dang “Acoustic analysis of the vocal tract from a 3D physiological articulatory model by finite-difference time-domain method,” The Inter. Conference on Automatic Control and Artificial Intelligence, Volume 5, 3265-3269, Xiamen, China, 2012, 3, 24-26
  15. D. Ying, X. Lu, J. Li, Y. Yan, J. Dang, F. Soong “Noise Estimation Using a Constrained Sequential HMM In Log-Spectral Domain,” ICASSP 2012, Kyoto, Japan. 2012, 3, 27
  16. 西村, 川本, 党, “形態学的情報に基づく個人化発話機構モデルの構築,” 日本音響学会春季研究発表会, 1-R-11, pp. 451-454, 神奈川大, 2012, 3, 13
  17. K. Fujii, A. Suemitsu, J. Dang, “Investigation of perceptual effects during learning process via vowel imitation,” RISP International Workshop on Nonlinear Circuits, Communications and Signal Processing (NCSP’12), pp. 393-396, Hawaii, USA, 2012, 3, 5
  18. N. Nishimura, S. Kawamoto and J. Dang, “Morphological personalization according to human mechanism using MR images,” RISP International workshop on Nonlinear Circuits, Communications and Signal Processing (NCSP12), pp. 497-498, Hawaii, USA, 2012, 3, 5
  19. D. YING, Y. YAN, J. DANG, F. SOONG, “Noise Power Estimation Based on a Sequential Hidden Markov Model,” the 8th International Conference on Information, Comm. and Signal Processing (ICICS 2011), Singapore, 2011, 12, 15
  20. 藤井, 末光, 党, “復唱による母音学習過程における音声知覚に関する考察,” 聴覚研究会資料, vol. 41, no. 9, pp. 689-694, 熊本県立大, 2011, 12, 11.
  21. Li, A., Fang, Q. & Dang, J., “Emotional intonation in a tone language: experimental evidence from Chinese,” ICPhS’2011, Hong Kong, China, 2011, 8, 18.
  22. X. WU, Q. FANG and J. DANG “Inverse estimation of motor command based on a 3D physiological articulatory model,” Spring Meeting of Acoustic Society of Japan, Tokyo, Japan, 2011, 3, 9.
  23. D. Ying, Y. Yan, J. Dang and Soong F, Noise Power Estimation Based on a Sequential Gaussian Mixture Model, in: the 4th International Conference on Image and Signal Processing, pages 2388-2391, Shanghai, China, 2011, 10, 16
  24. D. Ying, J. Li, Q. Fu, Y. Yan and J. Dang, Voice Activity Detection Based on a Sequential Gaussian Mixture Model, in: the APSIPA Annual Summit and Conference, Xi’an, China, 2011, 10, 20.
6. 研究組織
- (1) 研究代表者  
 党 建武 (Toh Takeshi)  
 北陸先端科学技術大学院大学・情報科学研究科・教授  
 研究者番号：80334796
  - (2) 研究分担者  
 徳田 功 (Tokuda Isao)  
 立命館大学理工学部・機械工学科・教授  
 研究者番号：00261389  
 (参加期間 2010-2011)
- 末光 厚夫 (Suemitsu Atsuo)  
 北陸先端科学技術大学院大学・情報科学研究科・助教  
 研究者番号：20422199